透析医のひとりごと

「青森県透析医会」

村上秀一

〈青森県の透析医療のスタート〉

青森県での透析医療の先駆けは，昭和40年頃だったような気がする．弘前大学医学部の第1外科と少し遅れて第2内科であった．第1外科では腎移植を目的としていたようで，それに付随する形で腹膜透析や血液透析治療を試行錯誤していた．第2内科では，心臓・血圧・肺・腎臓と血管循環器系の疾病に対し研究を行っていたので，その流れの中で私が腎臓グループとして血液透析を教室内で色々検討することとなった．その後，少し遅れて泌尿器科においても血液透析治療が始まり，この三つの科が共に切磋琢磨し，青森県の透析医療を牽引してきた．

血液透析治療によって腎不全患者の延命が期待できるようになってくると，透析患者数も増加してきた．当時，弘前大学では2床の透析ベッドから始まり，その後，6床まで増床されたものの不足は改善されるはずもなく，泌尿器科の教授であった舟生富寿先生の肝いりで，昭和49年6月に財団法人鷹揚郷腎研究所弘前病院が20床の透析ベッドで開院した．

〈青森県透析医会・青森人工透析研究会〉

それまで弘前大学医学部の第1外科，第2内科，泌尿器科がバラバラに行っていた勉強会を一つにし，昭和53年より青森人工透析研究会を開催している．第1回の研究会には，東京女子医科大学より平成22年にお亡くなりになった故太田和夫先生を招聘し，欧米の透析事情などをご教示いただいた．現在では，青森県内の透析医療機関の情報交換，また勉強の場として定着している．これまで発表された一般演題は1,000題を超え，特別講演にはその時々の最新の情報を全国の大学から教授らをお招きしてご講演頂いている．この研究会は毎年開催され今年で37回になるが，この間，私共が事務局を仰せつかっている（平成2年から日本透析医会より援助を頂いている「感謝！」）．

また，同時期より青森県透析医会を組織し，初代会長には弘前大学医学部泌尿器科教授舟生富寿先生に，さらに顧問には当時の青森県医師会会長猪股正先生にご就任頂き，各透析医療機関が地域において特殊な医療機関ではなく，一医療機関としてほかの医療機関と共に地域医療を担う役目を果たすことができるようにしてきた．現在では，弘前大学大学院医学研究科循環・呼吸・腎臓内科学講座教授奥村謙先生ならびに同泌尿器科学講座教授大山力先生が理事として加わり，さらに強く県内全透析医療機関の連携体制を構築している．

その表れが，先の東日本大震災の時であった．青森県は八戸市を中心とする県南地域が被害に遭ったものの，丸１日，停電のために透析治療ができなかっただけで，直接，津波に襲われた透析施設はなかった．しかし，ご存知のとおり，岩手県三陸沿岸，福島県，宮城県は多大な被害に見舞われた．

青森県透析医会は，震災直後から県内の透析医療施設の救援作業を行うと同時に青森県や青森県医師会と共に災害派遣チームを立ち上げ，被災地に向けてダイアライザー，医薬品，食料品などの多くの支援物資を地震で寸断された陸路をものともせず運んだ．また，支援物資だけではなく，被災した透析患者の受入なども県内透析医療機関のみならず，青森県にも働きかけ，行政と共に支援した．とくに岩手県医師会石川育成会長からの要請により，町長が津波により犠牲となった大槌町への医師，看護師などのコ・メディカルスタッフの派遣は，震災直後より約半年間行った．

〈透析療法の変遷〉

私どもも40数年前より血液透析治療を行ってきたが，透析そのものがどういうものであるのか，あるいはどうすればよいのか，その頃は試行錯誤を繰り返していた．風呂桶のような透析装置を色々作ってみたり，大量の生理食塩液を使ってやってみたり，さまざまな努力をした．最近の透析医療の，また，血液浄化法の流れをみると，隔世の感がするのはあの頃に透析に携わった人たちのほとんどではないだろうか．現在，当院にも40年以上透析を受けられている患者さんが２名いらっしゃる．

はじめは輸入もののコイル型や膜の張り方が下手で嫌だったキール型だった．除水もなかなか難しく，回路内に圧をかけて加圧で除水していたが，爆発させて周りがみんな血だらけになることもあった．黄疸になる患者や医師が大量に出たこともあった．私もその一人であった．その後，コルディスダウ社製（ダウケミカル社）のフォロファイバー型のダイアライザーが出てきた．当時の値段で１本５万円以上した記憶が残っている．ホルマリン漬けのフォロファイバーを１回，１回洗いながら使い，また，使っては洗い消毒しての繰り返しであった．今ではまったく考えられないことである．

透析療法も一般的な血液透析，腹膜透析，限外濾過，血液濾過，補助肝としての血漿交換などなど．透析技術がどんどん進化し，患者さんの状態に合わせた安全な透析ができるようになってきた．また，貧血などの合併症対策も進み，患者さんたちのQOLも維持されるようになってきた．しかし，まだまだ解決されなければならない合併症も多い．本当の腎臓の働きには，ほど遠い．

若い先生方をみていると新しいことばかりに目がいってしまって，基礎的な考え方がおろそかにされてしまっているような気がするのは，私だけであろうか……．温故知新という諺もある．これからも先輩の先生方，仲間の先生方，そして若い先生方と共に協力しながらお手伝いしていきたい．

青森県透析医会会長（青森県・村上新町病院）